

山々に湖水に

みずうみ

すべての自然の中に神宿る

魂のふるさと赤城山

地獄めぐり

日本人は古来より自然を崇拝し、山岳を信仰の対象としてきました。

赤城山も古くから山岳信仰の対象で、

それぞれの峰に赤城神が祀られています。

中世になると山岳信仰と仏教が融合して霊峰と称され、

その山の中には「浄土」と「地獄」が存在し、死者の魂は山に帰ると

考えられるようになりました。これを山中他界観といい、

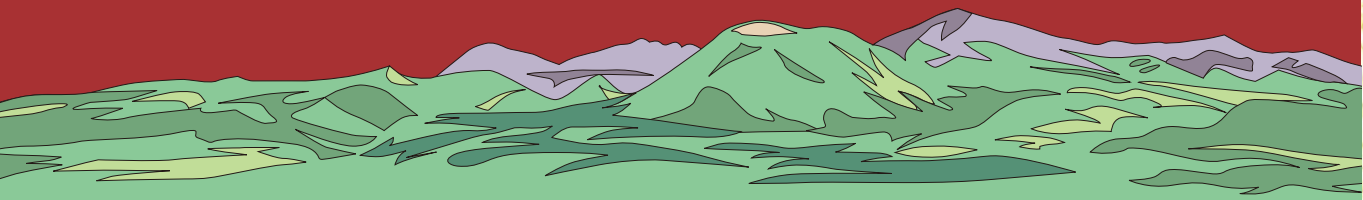
山に入って修行する者は山中で擬似的な

「死」と「再生」を体験するといわれています。

赤城山もこのような思想のもと、

山麓に住む人々は死者の魂を慰めに赤城山に登山する風習がありました。

また、修行の場として登山する行者もいました。



じぞうだけ

一 地蔵岳

元の名は神倉山 ほくらやま

神倉は神の坐の意 ホクラ

元々は神が赤城山の中心でしたが、仏教の地獄思想が入ってから死者の霊を治める山となり、地蔵岳という名称になりました。

赤城山の中でも地蔵岳は死者の魂が帰る山と考えられていて、旧暦の四月八日には前年に亡くなった人がいる山麓の家の人はず地蔵岳に登って、山頂でその人の名を呼びました。名を呼ぶと空のどこかに死者の面影が浮かぶと云われ、盛んに「魂呼び」が行われました。この登拝

は昭和の第二次世界大戦後もずっと

続けられ、五月八日の赤城山の山開き

には山麓の村々から大勢の人々が登

頂して、大沼湖畔も賑わいました。あ

なたも懐かしい人の名を呼んでみま

せんか!!

かつて地蔵岳の山頂には伏せた釜

の上にお地蔵様が安置されていまし

た。旧暦七月の盆の一日を群馬ではカ

マノクチアケと云い、その日にお地蔵

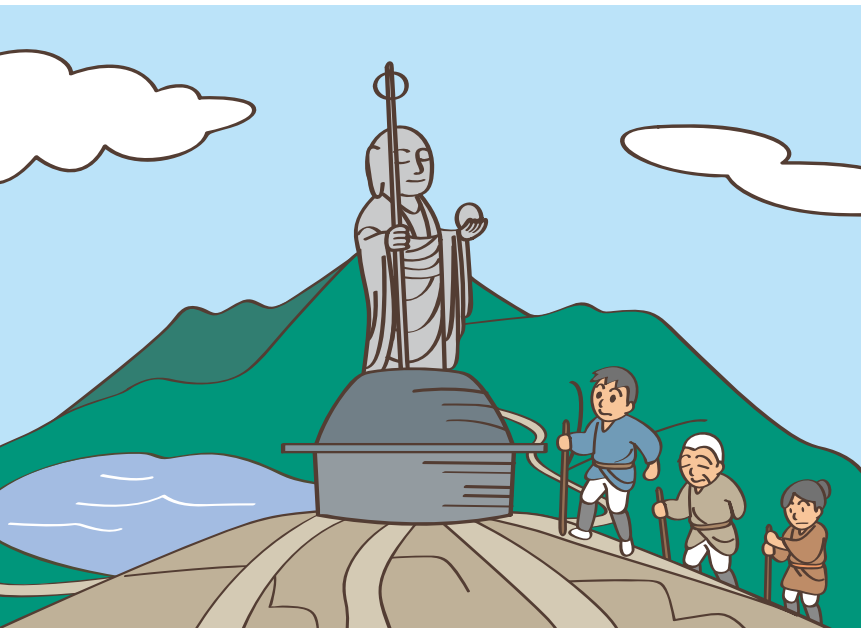
様は祖霊を故郷に帰してやるため、蓋

を上向きにします。山麓の人々はお地

蔵様の手助けをするために地蔵岳に

登り、釜を上向きにして来ました。他

の人々は赤城山から下りて来た祖霊をお寺にお迎えにあがります。



はつちようどうげ

二

八丁峠

むなつ はつちよう

胸突き八丁から付いた名

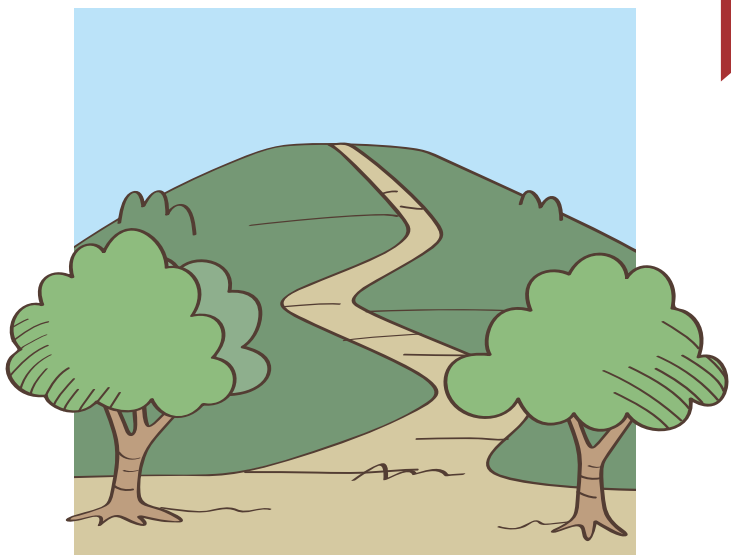
大沼湖畔から地藏岳の裾の胸突き八

丁と云われた坂を登った峠。

峠に以前は蒼頭河婆(九)姥子峠 参

照)の石仏が祀られていましたが、昭和

47年秋に紛失。



さんず

かわ

三

三途の川

赤城山には2カ所ある

現世から来世への死出の

旅の途中で渡らなければな

らない川。

川のほとりに奪衣婆と懸

衣翁が待っていて、死者の着

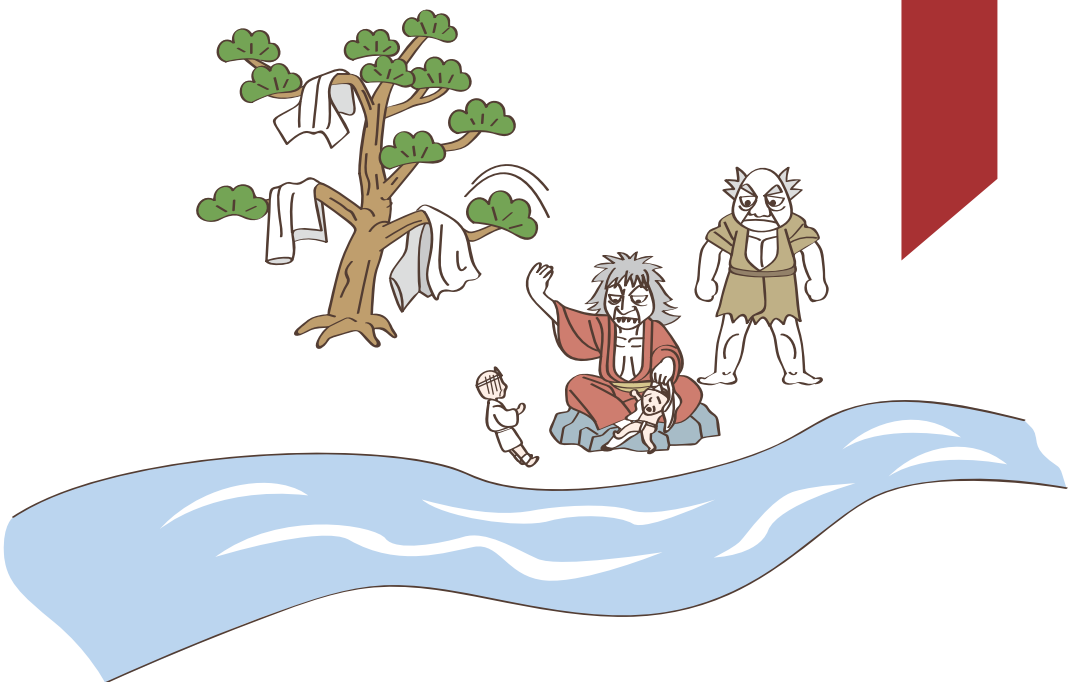
物をはがして木にかけ、枝の

たわみが大きければ罪も重

いとされ、それにより浅瀬や

急流など渡る場所が決めら

れました。



四 賽の河原

三途の川の河原

親に先立って亡くなった幼い
子供の行くところ。

そこで、子供が「一つ積んでは
親のため、二つ積んでは・・・」と石を積みますが、鬼に
壊されてしまいます。その子供達をお地蔵様が助けて
くれました。

一方、親は夜明け前に、亡くなった子供に会うため
賽の河原に行き、子供に代わって石を積んだそうです。



五 ガキボツタ

賽の河原の一部分と考えられる

子供を亡くした親が夜明け前に行
くと泥の上に小さな足跡がたくさん
残っていて子供達の騒ぐ声が聞こえ
たそうです。

また、餓鬼が食べ物を探して掘った
ぬかるみとも、子供が泥を掘って遊ん
でいた所とも云われています。



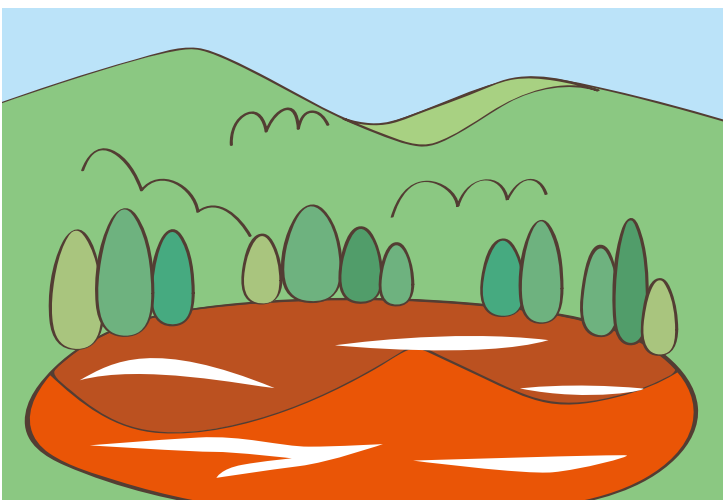
六 血の池

水の色が赤く染まることによる

小沼火山の小爆発によって形成された凹地で、雨量によって池の大きさが大きくなったり、干上がって小さくなったりします。

水量が増えるとヤマヒゲナガケンミジンコが大発生して、水が褐色に染まり、また秋には紅葉が池に映って赤く見えます。

地獄思想の罪人の刑場の一つとされる血の池にちなんで付いた名前と思われしますが、昔話には美しい娘が求婚を嫌い自死したその血で赤く染まったと伝わります。



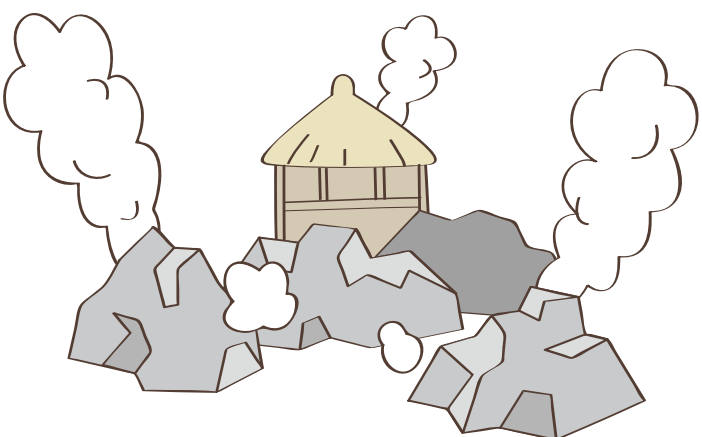
七 地獄谷

じごくだに

地獄を思わせる景色から付いた名

周囲が石ばかりでこの世と思えない凄惨な景色だったので名付けられ、この世で良いことをした人は地蔵岳に登り、悪いことをした人は地獄谷に突き落とされるということです。

地蔵岳の下で、かつてここに地蔵鉱泉がありました。



八

テンヤバ坂

テンヤ坂、天狗坂とも云った

荒山は赤城明神が一番先に住んだと云われる山で、その頃赤城明神の家来の杉の坊という大天狗が住んでいました。その天狗が荒山から飛んで来てテンヤバ坂で天邪鬼（妖怪）などと遊んだそうです。

この天狗とは、山岳信仰の宗教家修験の人であると思われます。



九

姥子峠

うばことうげ

オバコ峠とも ウバコとは奪衣婆のこと

姥子峠とはオバコ（蒼頭河婆、葬頭河婆、

正塚婆とも云う）のいる峠という意味で、

蒼頭河婆の石仏が置かれていました。蒼頭河とは三途の川のこと、船ヶ沢の上流と小沼の下流の二カ所にあります。

姥子峠を越えると急に天国のような広々とした所に出ます。



ろくどう

つじ

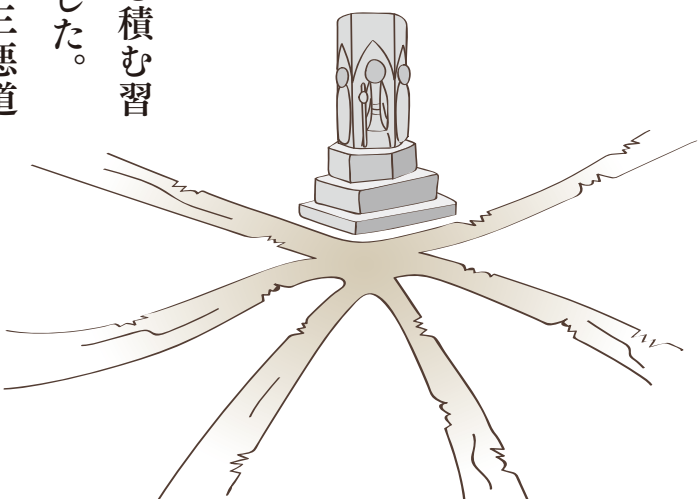
十 六道の辻

この世とあの世の境の辻

赤城山の西方からの登山道で、昔は6本の道が集まる所でした。ここには六地藏の石仏があります。この辻には死んだ子供のために石を積む習慣があり、そんな石積みが昭和の頃まで見られました。

仏教の六道とは三善道（天道、人間道、修羅道）三悪道（畜生道、餓鬼道、地獄道）のことで、六道へ行く辻という意味です。

六道の辻を越えると姥子峠に出ます。



制作：赤城山れんげつつじの会

参考文献：「赤城の神」今井善一郎／「赤城民族記」都丸十九一